



AFICS-JAPAN Newsletter

第20号

Mission Statement

国連システム元国際公務員日本協会
(AFICS-JAPAN)は、

- > 国連システムの活動に協力します
- > 会員のために必要な情報収集を行い、最新情報を提供します
- > 会員相互の意見交換や情報交換のための交流会を開催します
- > 国際機関で働く人材育成を支援します

<<記事一覧>>

- 第15回AFICS-Japan総会
- 第8期国連職員を目指す学部生・大学院生のための実践講座
- 特別シンポジウム An Eyewitness Account of Japan's Entry into the United Nations
明石康AFICS-Japan特別顧問
- 第6回会長とのオンライン対談
池亀美枝子氏
- 第7回会長とのオンライン対談
中村俊裕氏
- 国際公務員育成推進活動タスクフォース、新体制で始動
- 第56回FANFICS Council参加
- 2026-2027年新執行部役員
- 会員短信
 - 新入会員
- お知らせ
 - 2026年会費納入のお願い
 - 会員からの投稿募集

2026年7月31日発行

第15回AFICS-Japan総会開催

第15回総会は2026年3月23日(月)に国際文化会館で開催された。総会開催時112名の会員のうち、出席者は29名、委任状提出者は14名で総会定足数を満たした。第1部の総会議事では、以下の4つの議案について審議を行った。

第1号議案:2025年活動報告で、長谷川祐弘会長が2025年の活動報告を行った。第2号議案:2025年収支決算報告及び監査報告は、澤田良枝会計担当が2025年の会計報告を行い、奥田千恵子監査役が、2025年収支決算書などの関連書類がすべて適正であるとの監査報告書が提出された。第3号議案:2026-2027年事業計画案、2026年予算修正案及び2027年予算案については、長谷川会長が2026年及び2027年事業計画案の説明を行い、澤田会計担当が2026年予算修正案及び2027年予算案の説明を行った。

第4号議案:役員選挙については、石原直紀選挙管理委員長が、次期執行委員及び監査役候補者を決めるまでの経緯の説明をし、候補者リストを提出した。その後、石原委員長から、今期で執行委員を退任する井上健氏と田辺圭一氏、監査役を退任する奥田千恵子氏に感謝の言葉を、そして、新役員に対して激励の言葉が述べられた。

審議の結果、いずれの4議案も原案通り承認された。

総会後の第2プログラムでは、星野俊也・日本国連学会理事長、大阪大学名誉教授、国連システム合同監査団(Joint Inspection Unit of the United Nations System) 監査官を講師に迎え、「国連システムのいまとこれから」というテーマで講演が行われた。講演に先立って行われた明石康AFICS-Japan特別



顧問の挨拶の中で、明石氏は、日本が国連に加盟して70年、長い間存続してきたこと自体が素晴らしいことだと考えていると同時に、今の国際政局を見て、国連で働いてきたことがどういう意味があるのか、また、今後何を考えるべきかということについて考えさせられる。4月15日に国連大学で開催される特別シンポジウムで講演を行うが、その時に、長谷川AFICS-Japan会長やマルワラ国連大学学長ともそのことについて触れたい。そして、今日は世界中の11人のインスペクターとして活躍している星野氏からの話を

聞き、どのようなメッセージを伝えてくれるのか楽しみにしていると述べられた。(星野氏の講演の要旨はAFICS-Japanのウェブサイトに掲載されています。http://www.afics-japan.org/?page_id=3162)

星野氏の講演の後、集合写真を国際文化会館の中庭で撮影した。引き続いて行われた懇親会は、AFICS-Japan立ち上げの2012年から2014年まで副会長を務められた内田孟男氏の乾杯の挨拶で始まり、その後1時間ほど和やかな雰囲気の中で行われた。



第8期「国連職員を目指す学部生・ 大学院生のための実践講座」

AFICS-Japanが主催する第8期「国連職員を目指す学部生・大学院生のための実践講座」は、2026年3月25日～3月28日に開催され、53名が参加した。講義は、第1回：国連職員への道（講師：久壽居良外務省国際機関人事センター室長）、第2回：人事・財務・調達に関する国連の仕事（講師：滝澤三郎氏）、第3回：ジェンダー平等推進に関する国連の仕事（講師：宮負こう氏）、第4回：開発と気候変動に関する国連の仕事（講師：山崎節子氏）、第5回：法務に関する国連の仕事（講師：沖本慶一郎氏）、第6回：保健医療に関する国連の仕事（講師：野崎慎仁郎氏）、第7回：ITとグローバルデータ戦略に関する国連の仕事（講師：原実氏）、第8回：人権に関する国連の仕事（講師：佐治まどか氏）、の計8回行われ、これまでと同様に、毎日2時間目終了後に参加者同士の交流の場としてネットワーキングタイムが設けられた。講座終了後の参加者のアンケートの結果は、満足度が高く、参加者は年々増加の傾向にある。次回、第9期実践講座は、2026年8月26日から8月29日に開催される予定である。

特別シンポジウム An Eyewitness Account of Japan's Entry into the United Nations

国連大学と国連協会共催による日本の国連加盟70周年を記念する特別シンポジウム「An Eyewitness Account of Japan's Entry into the United Nations」が4月15日、15時から国連大学で開催され、明石康AFICS-Japan特別顧問が基調講演を行った。明石氏は、1956年12月18日、学生として国連総会議場で重光外務大臣の国連加入演説を聞いた経験を語り、その後国連職員として日本が世界の平和や安全保障に果たしてきた活動・役割を振り返るとともに、現在の世界の情勢をみて、日本がこれから何をすべきか考える時がきていると語られた。シンポジウムには様々な国籍の若い世代の参加者も多く、明石氏の話を熱心に聞いている姿がみられた。AFICS-Japanは協力する形で参加した。

第6回オンライン対談 国連合唱団平和コンサートと音楽による平和宣言 日本国連加盟70周年記念

第6回AFICS-Japan会長オンライン対談は、「国連合唱団平和コンサート」と「音楽による平和宣言」事業の統括実行委員長である池亀美枝子氏を迎えて2026年4月27日（月）午後8時から行われた。国連合唱団平和コンサートは、2026年10月に東京（10月13日）、長崎（10月16日）、京都（10月19日）、広島（10月21日）で開催される。

初めに池亀氏から国連合唱団の歴史と活動について説明があった。国連合唱団は1947年に国連職員のクラブ活動として発足した。構成員は国連職員だけでなく、その家族や各国代表部職員などによる多国籍合唱団であり、国連事務総長の非公式平和親善大使として任命され、平和文化促進のため様々な地域で平和コンサートを行っている。日本での最初のコンサートは1998年で、以後3年おきに行われてきたが、2015年を最後に行われていなかった。今年は、日本の国連加盟70周年記念の節目ということで、11年ぶりに国連合唱団平和コンサートが東京、長崎、京都、広島で開催されることとなり、各開催地でそれぞれ実行委員会が立ち上げられ、準備が進んでいる。東京公演は国連大学主催で行わ

れる。

国連合唱団日本公演の目的は、単にコンサートの成功だけでなく、コンサートを準備するプロセスで多くの人々に音楽を通して平和について考えてもらい、未来の世代に平和を継承し、世界に向けて平和文化の必要性を訴えることにある。国連合唱団は来日を機に各開催地で学校訪問や国際交流、原爆の被災者訪問、東京の高校の生徒の家でのホームステイなどの活動を計画している。また、国連合唱団平和コンサート事業を今回限りでなく、音楽による継続的な平和文化促進運動にしていくために「音楽による平和宣言」の署名活動を行っている。

続いて参加者との質疑応答が行われ、国連合唱団の組織・管理体制、広報活動、今後の日本での継続的な平和推進活動について議論された。

国連合唱団の組織・管理体制については、50名の団員で構成されている合唱団の意思決定機関として Executive Committee があり、合唱団のコンサートや公演についての決定を行っている。合唱団は国連のクラブ活動ではあるが、コンサート活動については、国連事務総長室から「公務」としての扱いを受けている。合唱団の音楽的質向上のため、プロの指揮者による指導や、優秀な歌手を外部から”Friend of UN Singers”として招いたり、若い世代や多様な国籍・背景を持つ外部ボランティアを募り多様性の向上を図るなどの提案が話し合われた。

広報活動については、平和コンサート、平和宣言、関連の平和推進活動についてのプレスリリースなどで情報を発信したり、NHK ワールドや読売新聞など主要メディアへの広報活動を継続し、特にNHKワールドでのインタビューやテレビ出演の調整を進めている。また、盲目のシンガーソングライターの佐藤ひらり氏が「音楽による平和宣言」の平和親善大使として、藤本八恵(Yae)氏(歌手の加藤登紀子氏の娘)が「食と環境」の特使、谷本真邦氏(世界連邦日本国会委員会事務局次長)が官民連携の活動推進のための「グローバルガバナンスと平和」の特使として活動している。

池亀氏は、今回の平和コンサートの実績を基に、日本において、音楽や芸術文化を通じて平和促進活動を継続するために、将来「協会」を設立する計画があると話された。参加者からは、今後、国連合唱団のコンサートの実施や平和文化促進運動において、大学等との連携を示唆する意見があった。最後に参加者から、「国連合唱団平和コンサート」と「音楽による平和宣言」活動に対し、期待と励ましの言葉が寄せられ対談を終えた。

(記録: 佐藤純子副会長)

池亀美枝子プロフィール

元国連職員日本人会会長・国立南アフリカ大学大学院 名誉教授

第7回オンライン対談 「国連での経験と現在のコペルニクの取り組み」



第7回AFICS-Japan会長オンライン対談は、インドネシアを拠点に、社会・環境課題を解決するための研究開発、実証実験と社会的ベンチャー創出に従事しているコペルニクの共同創設者でありCEOの中村俊裕氏を迎えて、2026年6月15日午後8時から「国連での経験と現在のコペルニクの取り組み」というテーマで行われた。対談に先立ち、中村氏は、国連での経験、コペルニクの創設の経緯、現在のコペルニクの取り組み、そして国連への示唆を含め現在の世界情勢について感じることを語った。



国連では、初めUNDPのJPOとして東ティモールへ赴任し、元兵士の社会統合や省庁の能力強化などに従事した。その時、東ティモールのUNDP常駐代表(ResRep)で国連事務総長の特別副代表(Deputy SRSG)だった長谷川祐弘氏(現AFICS-Japan会長)と知り合った。次にUNDPのLEADプログラムでジュネーブに赴任したが、直後にスマトラ沖大地震が起き、短期出張でインドネシアに行きそのまま赴任となった。震災後の資金の流れを見た時、民間からの資金の流れが多いこと、また多くの企業からの金銭以外の貢献が印象的だった。シエラレオネでは、平和構築基金で始まったプロジェクトに従事したが、仕事時間外に一般の人々と話す機会があり、彼らの生活がどうすれば良くなるかと考えるようになった。その後、ニューヨーク勤務となり、主権国家同士で成り立っているODAは、一般市民や企業のポテンシャルを最大活用していないのではとか、仕事をやった気にはなっているが、普通の人々の生活は本当に変わっているのかという疑問を持ち、国連には新しいアイデアを受け入れる文化はあるが、大組織だけに実現には時間がかかり、自分でやったほうが早いのではと考えるようになり、インドネシアでコペルニクを立ち上げた。最初は自宅が仕事場だったが、今はオフィスを構え、インドネシアで活動を拡大し、国際的な会議に声をかけてもらえることも増えた。

東ティモール国連事務総長特別代表の公邸で



現在、コペルニクでは、課題発見から、解決策をテストし、インパクト拡大までを行っている。例えば、天然ゴムの採取では、雨期にゴムの樹液が流され収益を失っていたが、雨除けをデザインし、試してみたところ樹液が流されなくなり、収益が上がった。また別の例では、家具の内職は孫請けの労働環境のため収益が少なかったが、オンラインでの直売を行うことで、収益を上げることができ、現在は、家具以外にもいろいろな製品をオンラインで直売するようになっている。さらに、効果ある取り組みを独立団体としてスピンオフさせるプログラム「ネクストCEO」を開始した。その一例として、ニワトリや魚の餌にするために、アメリカ水アブの幼虫の飼育プロジェクトを企業としてスピンオフし独立させた。この幼虫は生ごみを餌にするため、この企業は有機ごみ処理企業としても急成長している。また、国連退職後も、UNDPミャンマーとの協業、UNDP本部との共同調査、UNDPアルメニア事務所支援、UNVとの協業など様々なプロジェクトを国連と一緒にやる機会を続けている。コペルニク立ち上げから16年以上が経ち、これまで紆余曲折はあったが、やりがい非常に大きいと感じている。規模は小さいが、普通の人々の生活を眼に見える形で改善することへの手ごたえを十分感じるし、戦略、組織文化、人材の獲得や教育において自分が良いと思うコンセプトで組織を運営でき、何事も自分次第で早いスピードで実行できている。

世界情勢をみると、国際協力、国際協調というルールベースの国際秩序やMultilateralismの軽視、国家政府の保守化、多発する紛争によるODAの減少がおきている。他方、新しい資金の流れとして、インター

ネット革命やAI革命で富を築いたテック創業者が財団を設立し、国内外の社会課題へ資金提供を拡大している。これらの財団は、「イノベーション」と「素早さ」を評価するため、コペルニクはこれらの財団から資金を獲得し始めている。このような分断が進む世界、減少するODAを前提として、国連については、選択と集中をベースにした戦略の再構築が必要であると考え。国連の強みの源泉は、2つの世界大戦後の国際協調の枠組みとしての正当性、そして総会の一国一票、つまりミドルパワー結束の唯一の既存基盤であることであると思う。そして、国連の四つの目的の比較優位については、(1)平和・安全に関しては、正当性のある仲介能力を有する(大国の利害が絡む場所では機能不全である)、(2)人権においては、強制力が薄くとも規範設定機能を有する、(3)人道に関しては、中立性や迅速対応インフラを有する、(4)開発分野では、脆弱国家建設支援(東ティモール型)やアジェンダ設定(MDGs、SDGs、Human Security)ができることが挙げられると思うと話された。

続いて長谷川祐弘AFICS-Japan会長との対談が行われた。初めに、長谷川会長から、国連を辞めインドネシアでコペルニクを創設した理由と国連を辞めて独立することに不安はなかったかという質問に対し、中村氏は、国連を辞めたのは、国連に向いてないと思ったわけではなく、むしろ向いていると感じていたが、仕事に慣れてくると、やりたいアイデアがどんどん出てきて、自分でやった方が早いのではないかと独立という考えに至ったと答えた。インドネシアでは、大津波の後2年以上仕事をし、東ティモール時代もインドネシアには親しみやなじみがあり、立ち上げを助けてくれるという友人もいたこともあり、妻と一緒に創設し、以来、生活も仕事も一緒に同志という感覚である。立ち上げを決めた時に妻の妊娠が分かったが、若気の至りか、どうにかなるだろうと独立したと語った。

次に、長谷川氏は、コペルニクを創設した頃、どのようにしてブッシュ大統領、クリントン大統領の娘のチェルシー氏、そして安部元首相夫人などの注目を得ることができたのかを尋ねた。中村氏は、コペルニクを始めた2010年頃からはばらくは、世界的に、公共の資金を使った伝統的な決まりきった援助だけでなく、もっと新しいアイデア求める機運が広がっていた時期で、コペルニクはその波に乗ったのではないかと答えた。長谷川会長から、コペルニクの活動内容は、創設した頃と今とは変わってきているか、またコペルニクが成長し、成功した原動力は何かと思うかという質問に対し、中村氏は、活動内容は同じことの繰り返しでなく変わってきている。援助のプロジェクトで起こりがちな、「資金の終わりが活動の終わり」という慣習を超え、資金がなくなっても、効果を継続させる方法を考えている。手応えのあるプロジェクトを独立企業としてスピンオフさせる仕組みである「ネクストCEO」はその一例である。コペルニクが成長、成功した原動力は、いろいろなことに興味を持つことで、飽きずに楽しく仕事をすることができたことだと言うと答えた。

続いて参加者との質疑応答が行われた。最初にコペルニクでの人材育成についての質問があった。中村氏は人材あつての組織なので、良い人材に入ってもらい、内部の人材の育成を常に心掛けている。「ネクストCEO」の場合、内部の優秀な人材がスピンオフして企業を作るので、優秀な人材を失うことにはなるが、スピンオフした企業は、コペルニクの関連企業なので、そこに優秀な人材がいることは、コペルニクにとっても良いことであると答えられた。

育児をしながらの夫婦での共同事業の大変さ、ファンドレイジングや一般からの寄付、オンラインショップサイトの立ち上げなどに関する質問に対しては、インドネシアでは比較的安価にお手伝いさんを雇えるので、子供の世話は非常に助かっている。学費などは、国連のような寛大な教育費補助はないので、高校生になってくると大変にはなるが何とか捻出はしている。ファンドレイジングについては、立ち上げの時から最初の10年ぐらいまでは苦労し、色々な人の助けで何とか資金繰りをしてきた。寄付のサイト(<https://kopernik.info/en/donate>)もある。オンラインショップのウェブサイト制作では、完成前にお金を払ってしまい、仕事の途中で逃げられたこともあり、立ち上げるまでは大変なこともあったが、運よく乗り越えてきたと答えられた。

国連で働きたいという若者に対して国連に入ることを勧めるかという質問に対しては、真の意味での国

際的な経験を積める国連での仕事は、若い方々には是非勧めたい。今自分がやっていることは国連の経験があつてこそなので、国連には心より感謝していると述べた。

課題を選ぶ時、課題を決めてから資金繰りするのか、あるいはスポンサーの意見を聞いて、資金を出してくれそうな課題を選ぶのかという質問には、両方の場合があると答えた。後継者について考えているかという質問には、自分はまだ現役を続けるつもりなので、すぐには後継者のことは考えていないが、例えば自分が数か月休んだとしても仕事が回るような体制は、既にできていると回答した。

最後に長谷川会長が、16年間暮らしてインドネシアは変わったと思うかと質問した。中村氏は、ユドヨノ大統領、ウィドド大統領の時代は、民主化が進みGDPも順調に上がっていたが、現プラボウォ・スビアント大統領になってからやや保守化し、政策的にも市民との乖離が広がっているような気がするかと答えられ、対談を終了した。

(記録: 佐藤純子副会長)

中村俊裕氏プロフィール

コペルニク 共同創設者・CEO

2010 年、Ewa Wojkowska と共にコペルニクを共同創設。インドネシアを拠点に、社会・環境課題を解決するための R&D, experimentation と社会的ベンチャー創出に従事。

コペルニク創設前は国連開発計画(UNDP)に在籍し、東ティモール、シエラレオネ、インドネシア、ニューヨーク、ジュネーブを拠点として、ガバナンス改革、平和構築、モニタリング・評価、自然災害後の復興(スマトラ沖大地震及びインド洋津波後の復興等)に従事。

国連勤務以前はマッキンゼー・アンド・カンパニー東京支社で経営コンサルタントを務めた。

京都大学法学部卒業、London School of Economics and Political Science にて比較政治学修士号(MSc)取得。2012 年、世界経済フォーラム(ダボス会議)ヤング・グローバル・リーダーに選出。同フォーラムの「持続可能な開発」グローバル・アジェンダ委員会委員(2014-2016)、カーネギー国際問題倫理評議会の AI 倫理イニシアティブ・アドバイザー(2023-2024)等を歴任。現在、大阪大学大学院国際公共政策研究科招へい教授、Stanford Social Innovation Review Japan 編集アドバイザーも兼務。

主な著書・論文:『世界を巻き込む。—誰も思いつかなかった「しくみ」で問題を解決するコペルニクの挑戦』(ダイヤモンド社、2014 年)、「How spin-offs in the social sector can unlock impact from within」(Ewa Wojkowska との共著論文、World Economic Forum、2025 年 4 月)、「『スピンオフ』による非営利セクターの再活性化」(Ewa Wojkowska との共著論文、Stanford Social Innovation Review Japan、2025 年)

国際公務員育成推進活動タスクフォース、新体制で始動

国際公務員育成推進活動タスクフォースは、このたび新たなメンバーを迎え、総勢12名の体制で新たなスタートを切った。7月1日に行われた第8回オンライン会合では、これまで実施してきた大学生・大学院生向け実践講座の成果を踏まえ、活動のさらなる発展に向けて活発な意見交換が行われた。

会合では、今後取り組むべき新たな活動について幅広いアイデアが交換された。特に、国連を志す若い世代への裾野を広げるための中高生向けプログラム、JPO試験対策や社会人向け講座、さらには現役国連職員を対象としたキャリア形成支援など、多様な世代・対象者への新規プログラム案が数多く提案された。国連経験者ならではの知見や人的ネットワークを生かし、次世代育成にこれまで以上に貢献していく方向性が確認された。

今後は活動をより機動的に進めるため、「オンライン活動」「対面活動」「政策提言」の3つのグループを設置し、それぞれが具体的な企画や事業を推進していくこととなった。講座の企画・実施に加え、学校との連携や政策提言など、多方面から国際公務員育成を支える体制が整ったことは大きな前進である。

新体制となったタスクフォースは、AFICS-Japanならではの強みを生かしながら、日本の国際公務員育成に一層貢献していく考えである。会員の皆様からのご支援、ご協力もいただきながら、活動の輪をさら

に広げていきたい。

第56回FAFICS Council参加

第56回FAFICS Councilは2026年7月20日～7月24日、ウィーンでハイブリッド形式（対面とオンライン）で開催された。AFICS-Japanからは、Head of Delegationとして佐藤純子副会長、その他に永吉紀子執行委員、堀幸恵執行委員、後藤ギル美晴執行委員がオンラインで出席した。Councilの報告書は次号のニュースレターに掲載予定である。

2026-2027年 新執行部役員

第15回総会の後、執行委員会が開催され、信任された9名の執行委員による話し合いの結果、執行委員の役割分担について合意した。また、後日、コミュニケーションを担当する役員の必要性について執行委員会で話し合われ、新たにコミュニケーション担当についても合意され、新執行部役員の役割が以下のように決まった。

会長：長谷川祐弘

書記：宮地節子

会計、ニュースレター担当：澤田良枝

IT、年金担当：後藤ギル美晴

事業担当：中山暁雄

監査役：楨恭子

副会長：佐藤純子

書記、事業、コミュニケーション担当：堀幸恵

年金、IT担当：永吉紀子

事業担当：山崎節子

特別顧問：明石康、山本和

会員短信

- **新入会員**

高橋伸子さん（UNICEF）、須賀正義さん（Department of Global Communications）が新たに会員となりました。2026年7月31日現在の会員数は113人です。

お知らせ

- **2026年会費納入のお願い：**

2026年会費（5千円）の納入をお願いします。

三菱UFJ銀行麹町支店（店番 616）

普通預金：口座番号 0118643

口座名義：アフックス ジャパン 澤田 良枝（振込確認欄には会計担当者の名前が印字されます。）

☆振込人のお名前は会員のお名前をお願いいたします。

前年度会費未納の方は、その分も合わせてお振込みください。

- **会員からの投稿募集:**

AFICS-Jの中で共有したい情報(会員自身の著書出版やリタイア後のお話しなど)の投稿をお待ちしております。その他にもニュースレターで取り上げてほしいテーマやご意見がありましたら、AFICS-Japan事務局までご連絡ください。

事務局連絡先: afics.japan@gmail.com

ホームページ: <http://www.afics-japan.org>